

『リモージュ司教にしてガリアの使徒である
聖マルシアルの伝記』(XIV-XX) 試訳

渡 邊 浩

凡例

1. 本訳文は *Vita eivsdem S. Martialis episcopi Lemovicensis et Galliarvm apostoli, conscripta ab Avreliano Lemouicensium episcopo, Diui Marcialis auditore olim eius beneficto à mortuis excitato edita vero ex MS. Ecclesiae S. Marcialis Parisiis à R. Fr. Thoma Beaulxamis Carmerita: in L. Surius, De probatis sanctorum vitis* (Cologne, 1618), 6: 365-374 の試訳である。今回訳出したのは、前回の続きにあたる 14 章から 20 章で、全 27 章のうちのほぼ中間部分となる。残りの章については次号への掲載を予定している。なお、テキストの入手に当たっては Universitäts- und Landesbibliothek Sachsen-Anhalt in Halle (Saale) よりマイクロフィルムの提供を受けた。
2. 現代語訳としては R. Landes et C. Paupert, *Naissance d'apôtre: La vie de saint Martial de Limoges*, Turnhout, 1991, pp.45-104 に仏訳があり、翻訳に当たってはこれを参照した。
3. 仏訳における各章の表題は原本の欄外に書かれた文章である。これら欄外の文章は単なる表題ではなく、最初の一、二文を除くと、欄外註のようにアルファベットが付され、本文中のアルファベットを付された箇所と対応している。この試訳でも仏訳にならって欄外の文章を各章の表題としたが、アルファベットは残した。また、原本ではページ毎であったり章毎であったりしたアルファベットの振り方を、ここでは章毎に統一した。さらに、欄外の文章にはアルファベットを欠い

たものもあるが、訳者がアルファベットを補い、本文との対応関係を示した場合もある。

4. 固有名詞はラテン語読みを基本としたが、聖マルシアルや聖ペテロなど、慣用化した呼称を用いた場合もある。
5. 聖書の引用箇所指摘については、仏訳の註に基づいたが、訳者が訂正した個所もある。また、訳文は原則として『新共同訳聖書』に従った。

XV. ステファヌスはローマへ召還される。a) 最良の軍指揮者が取った措置。b) ステファヌス公は、その当時ローマにいた至福なるペテロのところへ、祝福を受けるために、部下とともに向った。c) 最高の司祭は、いかなる謙虚さを以て訪ねるべきか。d) 聖ペテロは彼らが何者なのかを確かめる。e) ステファヌスは聖マルシアルの行いを語る。f) ステファヌスは聖ヴァレリアを殺害したことの赦しを至福なるペテロに求める。g) 金は聖マルシアルのもとに送られる。

そうこうするうちに、皇帝はその治世の初年に、ガリアの統治者であるステファヌスに飛脚を送って書簡を届け、皇帝の下で6カ月の奉仕を果たすべく、4軍団の兵士を率いてイタリアに来るよう命じた。a) そこでステファヌスは、だれも人から求めたり奪ったりすることのないよう、物資を十分に調べて出発するよう命じた。このように禁じた上で、もし奪ったりする者があれば、その者は死罪とするとの布告を出した。さて、ステファヌス公はこのように定めて軍隊を集めると、受け取った命令に従ってイタリアへと出発した。そして皇帝への奉仕を果たして、帰国の許可を得たとき、彼は全軍に向かってこのように言った。b) 「我々は皆、我々の師であるマルシアル様が命ぜられたとおり、ともにローマへ、使徒たちの頭である至福なるペテロ様のところへ赴き、我々に祝福を与えてくださるようお願いする。それは、同時に、彼から罪の赦しをいただくためである。」ところで、彼の全軍は至福なるマルシアルから洗礼を受けており、したがってこの演説は皆の賛同を得た。

さて、彼らはローマに入ると、ヴァティカンと呼ばれる場所で、人々の群に教えを説いている使徒を見つけた。c) 彼の姿を見ると、公と彼の全軍は、大いに謙って、裸足で、粗衣をまとして、彼の足下に身を投げ

出した。すると至福なるペテロは、このように立派な人々を見て、尋ねた。d) 「あなたたちはどこからここに参りましたのか。」公は答えた。「私たちはガリアの諸地方からここに参りました。私たちは至福なるマルシアル様に信仰の言葉で照らされました。」すると、使徒は言った。「どのように照らされたのですか。」公は答えた。「私たちは神の福音の言葉によって教えられ、罪の赦しのために洗礼を受けました。」これを聞くと、ペテロは二度感謝をし、こう述べて主を称えた。「主よ、私は祈願いたします。マルシアルの聞き手、慰め手となってください。というのは、彼はあなたの名のために遠い国へ赴いたのですから。そして、あなたに遣わされて、あなたの使命に従い、たいへんな苦境の中にいるのですから。あなたの名のために、彼は鎖につながれて牢に入れられ、そのうえ酷くむち打たれました。主よ、彼に祝福とお恵みをお与えください。そして、それらが彼のもとに永遠に留まりますように。」それから、公の方を振り向くと、彼は公に尋ねて言った。そのいとも聖なる人は、彼らのところでどのように振る舞っているのか、と。e) 公は彼に答えた。「彼は私たちのところで、主の名において、多くの死者を蘇らせました。そして、彼が神に求めたことは何であれ速やかに成し遂げられます。」f) このように語ると、ステファヌスは至福なる使徒ペテロの足下の地面に身を投げ、至福なる乙女ヴァレリアの殺害に対する寛大と赦免を嘆願した。それから、至福なるペテロは彼の方に視線を向け、溢れる涙と謙った表情を認めると、彼を罪の束縛から解いた。さて、赦免の後、公は、皇帝ネロから贈り物として受け取っていた200リブラの金を、至福なるペテロに差し出した。g) しかし、至福なるペテロは、この金を聖なるマルシアルのところへ持ち帰るよう、公に命じた。というのは、マルシアルは今後ガリアに多くの教会を建てなければならないからであり、あるいは貧者に与えるためでもあった。

さて、ステファヌス公は至福なるペテロから祝福を受けると、全軍を率いて自分の国に引き返した。そしてガリア地方にはいると、彼は自らの軍隊すべてにこう語りかけた。「伯、戦友、そして私とともにあるすべての戦士よ、私の言うことを聞いてもらいたい。我々のだれも、至福なるマルシアル様のところに赴かずして、自分の土地に戻ってはならない。なぜなら、彼の執り成しのゆえに、主は我々に幸福な旅を与えてくださっ

たからである。」こう語り終えると、彼は帰路についた。

- XV. ポワトゥー伯アルカディウスの息子ヒルデベルトゥスが悪霊によって窒息させられる。よその地方の人々が群をなして至福なるマルシアルのところへ集まってきていた。a) マルシアルは息子がなくなったことを知っていた。b) 悪霊たちは命じられる。c) 悪霊たちによって遺体が返される。d) 悪霊たちと対峙するマルシアル。e) 悪霊たちの恐ろしい姿。f) 悪霊たちの名前。g) マルシアルはあらゆる言葉を知っている。h) 悪霊たちが追い払われる。i) 人々はマルシアルに死者を蘇らせるよう懇願する。j) ヒルデベルトゥスは蘇えらされる。k) ヒルデベルトゥスは自分が見たことを語る。l) 浄罪の火。m) 若者が心配されたこと。n) これらは恐らく比喻によって語られた。o) 聖マルシアルはミサを挙げる。p) ヒルデベルトゥスは剃髪をする。q) ぶどう酒と肉を断つ。r) アルカディウスは聖職者に財産を贈る。

さて、彼らは旅をしていると、たまたまイオゲンキアクムと呼ばれているある王宮にたどり着いた。そこで、様々な地方から集まった諸侯や伯らは皆、ヴィエンヌの川岸にテントや仮設の小屋をこしらえた。ところで、彼らは太陽の熱に焼かれたので、川に行って暑さと汗から一度に逃れようとした。その中に、ポワトゥー伯アルカディウスの息子ヒルデベルトゥスがいたが、彼はガルリクスと呼ばれる場所にやって来ると、悪霊に窒息させられて死んだ。全軍が彼を探しに出かけたが、どこにも見つけることができなかった。その時、父親のアルカディウスは、彼の全軍とともに、あまりの悲しさに打ちひしがれ、涙ながらに、そして謙虚に尊敬の念を抱いて、至福なるマルシアルのところへやってきた。その当時、至福なるマルシアルはリモージュにいて、様々な地方や地域から救いの言葉を聴きにやって来た者たち皆に、神の言葉を休むことなく説いていた。アルカディウス伯が息子のために嘆願しにやって来た時には、ゴート人とバスク人が大群をなして彼のもとに集まって来ていて、彼から洗礼を受け、秘跡によって真の信仰に与りたいと願っていた。a) ところで、至福なるマルシアルは、アルカディウスがぼろぼろの衣服を着てやって来たのを見て、彼に言った。「我が息子、アルカディウスよ。嘆いたり、泣いたりしてはならない。なぜなら、あなたの息子の魂は聖

なる天使に受け入れられたのだから。」しかし、アルカディウスと全軍が神の人の足下に身を投げると、彼自身も涙を流して泣き始めた。というのは、アルカディウスとともに皆が、神の僕に、若者が捕らえられ川の水に沈められている場所に行ってくれるよう、嘆願したからである。それから、皆といっしょに、主の弟子は裸足で、苦行衣をまとって、その場所へ赴いた。

さて、皆が祈るなか、至福なるマルシアルは次のように言った。b)「人類を惑わそうとこの落とし穴に隠れているろくでなしの悪霊どもよ。お前たちに命ずる。お前たちが不相応にも思い上がって殺した若者の体をこの川岸に持って来い。そうして、ここに集まった人々皆がお前たちを見ることができるよう、お前たちも姿を現わせ。」c) 彼がこれらの言葉を述べると、若者の体は、およそ6スタディオン離れた川岸に投げ出された。一方、悪霊たちは豚に似た姿で現れた。その時、人々は皆、聖なる人に、悪霊たちがこの川を出て行くよう、また人々に悪霊だと分かる姿で現れるよう、命じて欲しいと頼んだ。d) そこで至福なるマルシアルはこう述べた。「この渦の深淵に潜むサタンの天使らよ。私はお前たちに命ずる。すべての人々がお前たちを見分けられる姿で、ここにいる人々の目の前に出て来い。」この声を聞くとすぐに、悪霊たちは激しく暴れて彼のすぐ足下に現れた。e) ところで、彼らはエチオピア人のように煤より黒く、彼らの足は大きく、目つきは恐ろしく残酷で、その髪は全身を覆っていた。さらに、口と鼻の孔からは硫黄質の炎が吹き出していた。しかし、彼らは、話すときカラスの声をまねているように聞こえ、手には火の鎖を持っていた。

至福なるマルシアルは彼らに言った。f)「お前たちがどのような名で呼ばれているのか、皆の前で言え。」彼らの一人が言った。「俺の名はミッレアルティフェクス Milleartifex だ。」使徒は尋ねた。「ではどうしてお前はミッレアルティフェクスと呼ばれているのか。」悪霊は答えた。「それは、俺が人類を欺くために千の mille 術を artes 持っているからだ。」それから彼はもう一人の悪霊に呼びかけて尋ねた。「それでお前はどんな名で呼ばれているのか。」悪霊は答えた。「ネプトゥヌスだ。」彼は尋ねた。「なぜネプトゥヌスという名なのか。」悪霊は答えた。「なぜなら、俺はこの落とし穴に多くの人間を突き落とし、彼らを地獄の苦悩の中に沈

めたからだ。」聖なるマルシアルは尋ねた。「どうしてお前たちは火の鎖を手に持っているのか。」「俺たちが人間の魂を捕らえたときに、この鎖で縛って俺たちの主人のところへ連れて行くためだ。」聖なるマルシアルは尋ねた。「お前たちの主人は何という名だ。」悪霊たちは答えた。「リクソアルドゥス Rixoaldus だ。」使徒は尋ねた。「なぜリクソアルドゥスと呼ばれているのか。」悪霊たちは答えた。「それは、彼が常に争い rixa を求めており、常に怒りっぽく、腹を立てているからだ。」それから、悪霊たちは神の人に懇願し、次のように述べた。g) 「主よ、頼むから、どうかこれ以上ラテン語で話さないでくれ。それよりはヘブライ語か、あなたが望む言葉で話してくれ。あなたはあらゆる言葉を知り、理解しているだろうから。だが、ここであなたの慈悲を求めたい。どうか俺たちを地獄や大海に送らないでくれ。」h) そこで、聖なるマルシアルはヘブライ語で言った。「ユダヤ人たちが十字架に架けた我らの主イエス・キリストによって、私はお前たちに命ずる。砂漠に去れ。そこには飛び鳥もなく、人も住んでいない。そして、いかなる被造物にも害を加えることなく審判の日までそこに留まれ。」これらの言葉を聞くと、悪霊たちは海を越えて飛び去り、姿は見えなくなった。

ところで、伯とすべての民衆、また様々な地方から招集され、さらにこの光景を見ようと集まった全軍、これらの者たちは皆、神の人の足下にひれ伏した。i) そして、彼らは涙ながらに懇願した。ろくでなしの敵どもが狡猾にも若者の体から無理に追い出した魂に、元の体に戻るよう命じて欲しい、と。そして、それは古くからの敵がこの出来事を嘲って喜ぶことがないようにするためである、と。さて、いとも至福なるマルシアルは人々の涙に心を揺り動かされ、次のように言った。「皆さん、ともに主に祈りましょう。主がその体から離れるよう定めた魂を、元の住まいに戻して下さるよう。」j) そして、若者の手を取ると、彼はこう言った。「ヒルデベルトゥスよ、我らの主イエス・キリストの名において、起き上がりなさい。」すると若者はすぐに起きあがり、神を称えるすべての者たちの前に生きている姿を示した。これを見て、公とすべての人々は、為されたことのゆえに主を賛美し始め、主の名を称えた。主は称える者たちに自ら全てを与えられ、自分の不在を決して認めさせない方である。それから、至福なるマルシアルは蘇ったヒルデベルトゥスに呼びかけ、

彼にこう言った。「どのようにして、あなたは悪霊たちの虜とされたのか、私たちに話さない。」k) 彼は答えた。「私が太陽の暑さに疲れ、体の汗を洗い流していたとき、突然悪霊たちが私を落とし穴に突き落とし、私を窒息させました。彼らが私を火の鎖で縛って駆り立てようとするとき、直ぐさま主の天使が私の傍らに立ち、彼らの手から私を引き離して言いました。『この青年はまだお前たちの支配下にはいない。』私たちが東に向かい始めたとき、悪霊たちの部隊二つが私たちの方にやって来て、一隊は私たちの行く手をふさぎ、もう一隊は後方から私たちに燃える矢を射かけました。それで私が恐ろしくて震えていると、天使が私に言いました。『恐れるな。主があなたの守護者であり、主があなたを助けるために私を遣わしたのだから。』響きわたる声でこのように述べると、天使は主のために甘美な旋律を歌い始めました。『わたしの魂よ、主をたたえよ。わたしの内にあるものはこぞって聖なる御名をたたえよ(「詩編」103章-1節)。主はあなたの罪のために犠牲とされ、あなたを地獄から買い戻されたお方。』歌っているうちに、私たちは浄罪の火のところにとどり着き、私は心の中で、これが地獄かと考え始めました。いとも聖なる司祭様、あなたがそれはたいへん恐れなければならないものだと皆に説くのを、私は聞いたことがあります。突然天使が私の方を振り向くと、こう私に答えました。l) 『これはあなたが考えているような地獄などではなく、浄罪の火である。あなたが確かなことだと知っておかねばならないのはこのことである。すなわち、悪事を犯した後に行いを改め、気前よく施しをすることで再度回心し、そして流した涙によってもう一度洗礼を受けて、犯した悪事を償った者たちが、神の無償の哀れみによって解放されるのである。彼らが救われるのは自分たちの功績によるのではない。そうではなく、すべての人が救われることを望み、自らが買い戻したうちの一人も自らの羊小屋から閉め出されないよう望まれる方の功績によるのである。彼らは地獄の火から離されると、あなたが見ているこの場で浄罪の火により清められるのである。洗礼を受ける前は、あなたは様々な過ちに巻き込まれるに値し、あなたは危うくて無節操な者として振る舞った。しかし、使徒、聖なるマルシアルによって洗礼の聖なる水で洗い清められた後、あなたが重大な罪に巻き込まれることはそれほどなかった。m) しかしながら、酒や無駄話に過度に夢中になるなら、あな

たはこの火で清められるのを恐れねばならないだろうか。』

若者は話しを続けて、浄罪の火がどのようなものかを説明した。n)「この浄罪の火は川の流れて、その上に橋が架かっています。主の天使は私をそこに連れて行き、手を取って私をそこに立たせ、言いました。『すべての罪から清められて、天の王国に与るのに相応しくなるまで、あなたはここに留まるであろう。』こうした後、私たちは天国の門のところにとどり着きましたが、その近くにも悪霊たちがたくさん集まっているのを見ました。それから彼らは私たちの旅の案内役の天使に話しかけました。『もし主が公平な審判者だったら、この若者は俺たちのものだろう。なぜなら、彼はその行いに倣った者の息子と呼ばれるのが相応しいからである。』彼らがこのような話をしている間に、天からの声が次のように語るのが聞こえました。『この青年の魂はその者の肉体に戻り、その者はなお26年生きることになる。』そこで私は私を案内してきた天使に言いました。『お願いです。主よ。私は俗界に戻りたくありません。私はとても誤りやすいことを知っておりますから。私のもろい行状のゆえに、私がすぐにここに戻って来ることを嘆くことにならないように。』すると天使は私に言いました。『あなたは自分の思うようにはならない。片方の手のみで全世界を握って支配し、あなたの行状を公平な秤で量って支配される方の命ずるがままになる。』私を導いてきた主の天使は信じられぬほど美しく、その外見は、人の本性を超えていました。そして、私は彼に言いました。『主よ、お願いです。私たちの至福なる師マルシアル様が天でどのような報酬を得るのかを教えてください。』彼は答えて、私にこう言いました。『彼は天でたいへん大きな報酬を受ける。青年期に彼が主に仕え始めて以来、また至福なるペテロに付き従い始めて以来、彼は父の家に戻らず、女性への欲求を捨てて貞潔を堅く守り続けており、またそうであろうと決心している。それゆえに、当然のことながら、彼が肉欲とは無縁だと認められているように、死の苦しみとも関わりを持つことはない。なぜなら、12人の天使が主から遣わされたが、彼らは常にマルシアルとともに歩み、彼が疲れたり、空腹になったり、喉が乾いたりしないよう、取り計った。天使たちは彼をあらゆる悪から守り、苦痛とのあらゆる接触から完全に引き離れた。』それから、彼は再び私にこう言いました。『主の命令で、悪魔の企てからヨブを守り、彼からあらゆる惨事を取

り除き、主の許しを得て、彼を永遠の命の約束の相続人としたのは私である。』さらに彼は私に言いました。『あなたは自分の体に戻るようになるが、あなたがかつてそうであったように、これ以上恥知らずで自堕落に舞うことのないよう気を付けなさい。また、少し前にあなたがたいへん恐がったこの火を恐れてはならない。あなたの欲望に従ってはならない。なぜなら、あなたは、悪霊たちがあなたにいかなる過酷を加えようとしたかを見たのであるから。ところで、神は公平な審判者である。すべての者たちが救われることを欲し、自分が買い戻したうちの一人も自分の羊小屋から閉め出されることのないよう望んでおられる。神はだれの魂が減びるのことも望まなかった。なぜならそのために神は自らの尊い血を流したのであるから。』」

これらの言葉を聞いて、至福なるマルシアルとステファヌス公は集まったすべての人々とともに主に祈り、与えられた恵みに対して主に感謝の賛歌を捧げ、そして世々限りなく祝福されてきた主の栄光ある名を称えた。o)それから、彼らはマルシアルの司教座の聖堂、すなわち最初の殉教者である至福なるステファノの教会へと赴いた。祈りの歌声が響くなか、いとも至福なるマルシアルは、荘厳にミサを執り行ない、神に犠牲を捧げた。p)さて、蘇らされたその若者は、剃髪をし、この至福なる人物から決して離れず、完全な服従をもって絶えず仕えることを約束した。確かに、彼は天使に命じられた忠告を守った。q)彼は常にこの神の僕とともに留まり、絶えず彼に付き従い、ぶどう酒を飲まず、肉を食べなかった。履き物は用いず、だが、パンと水飲みの食事、そして苦行衣で満足した。すなわち、彼は不断の祈りと頻繁な断食と、善行への絶え間ない専心に身を捧げていた。ああ、お慈悲がありますように。彼は親から受けた財産を貧しく困窮した者たちに分け与え、自分の翌日のためには何も取っておかなかった。r)彼の父のアルカディウスは、聖ステファノ聖堂の司祭たちに多くの寄進を行い、それによって司祭たちが生活の糧を補充し、衣服の不足を補えるよう取り計らった。さて、ヒルデベルトゥスにならって、多くの者たちが自らの欲求をはかない世の空しい享楽で満たすことを拒否し、神のみに気に入られようと過去の生活の誤りから引き返し、自らを神の所有に委ね、先々のことを考えて正しい道に戻った。そして、彼らはヒルデベルトゥスとともに神に心を向け、

永遠に存在する物のみを求め、永続しな得ない物を退けた。

XVI. ステファヌスは自らの支配の及ぶ全地域に布告を出し、偶像を破壊し、キリスト教信仰が広められるよう命ずる。a)かつてだれもガリア人の王と呼ばれたことはなく、ただ諸侯と呼ばれた。なぜならガリアはローマの皇帝権に従っていたからである。b) ぶどう酒と肉を断つ。c) 施し物についての決まり。d) 裁判官の職務。e) 司祭たちに与えられるべき名誉。f) 年に四度、羊の群は牧者によって再確認されなければならない。g) いかなる信仰を以て、聖人たちの教会は訪ねられるべきか。h) 諸侯たちは自分たちのうちで何が輝かしいことなのかを知るべきである。i) キリスト教信仰における貞潔が確認される。

さて、こうしたことがあったすぐ後に、いとも至福なるマルシアルの命令によって、ステファヌス公は、海に面した全ての地方と、自分の支配に服していたガリアの全地域に使者を送った。それは、異教徒たちが崇めているように思われたすべての偶像を打ち壊して燃やし、そしてその異教徒たちが唯一全能の神に気持ちを捧げ、その神に従うようになるためであった。ところで、もしだれかがこの規定を無視して、敢えてそれを破ろうとしたなら、その者は疑いなく公に対する大逆の犯罪人たろうとしているのだと知ったであろう。さて、祝福を受けた後、ステファヌスとすべての人々はいとも輝かしい人物のもとを去り、各々、大いに喜びそして神を称えて、自分の土地へと戻った。a) さて、公は、既に述べたように、ローヌ川から大洋に至るまで支配権を握り、ロワール川の流域全体とアキテーヌ全体、あるいはバスク人とゴート人の国々を所有していた。しかし、彼はガリアのきわめて有力な王であったとはいえ、王と呼ばれてはいなかった。なぜなら、その当時、西方ではだれも勝手にこの称号を名乗ってはならず、ローマ帝国の支配を握るネロのみがローマにおいてこれを名乗っていたからである。さてそこで、この人物は、自分の命令に従う全領域に主を敬うよう指示し、あらゆる聖所や偶像の神殿を燃やし尽くすよう命じた。b) さらに、彼は師から学んだとおりに、信仰の際立った誉れを示していた。すなわち、彼は週の第4日と第6日にはぶどう酒を飲まず、肉を食べなかった。c) その上、彼に出されたあらゆる美味な料理については、それらの十分の一が分け与えられ

る前に、すぐに口にすることは決してなかった。なぜなら彼は施しに専念し、また永遠の命とかかわる万事において、力の限り喘ぎながら、敬虔な行為に専念していたからである。d) 裁判官の座においては、彼は贈り物によってだれのための役目をも引き受けず、貧者や放浪者や寡婦や孤児らの貧窮を軽減しようと細心の配慮をし、そして、至福なる彼の師が彼に繰り返して命じていた、また詩編作者が歌った、次の格言を忘れることがなかった。「いかに幸いなることか、裁きを守り、どのような時にも恵みの業を果たす人は。(「詩編」106章3節)」ところで、もしだれかキリスト教徒が何かに事欠いているのを見つけたなら、彼は自分の財産を使ってその者を豊かな者とし、また公の金庫から資金を^{おおやけ}与えて、食糧と衣服の不足に困らないようにした。e) 司祭と神に仕える全ての者たちに対しては、師から教えられたとおりに、然るべき敬意を払った。f) すなわち、年に四回、四季の斎日に、彼は毎年自分に従う者たちをすべて連れて至福なるマルシアルのもとに赴いた。g) 彼は至福なるステファノの教会で断食と祈りのうちに3日間を過ごし、救いの言葉を聴いた。そして、灰に覆われて苦行衣をまとして来るのを慣わしとし、喜びにあふれて家に帰って行った。h) さらに、彼はキリストのために施しと祈りによって日々熱心に務めを果たし、また不信心な異教徒たちの心を悪魔から引き離し、キリストに従うよう呼び戻していた。確かに、彼は生来慎重で、キリスト教徒たちには父であり、また異教徒たちには恐ろしい迫害者であった。要するに、彼は聖なる洗礼による再生を得て以来、i) 女性と関わって汚れることはなく、亡くなる日まで心身の貞潔を保った。

XVII. 体の麻痺したボルドー伯シギベルトゥスが聖マルシアルによって癒される。a)シギベルトゥスは妻に頼む。シギベルトゥスの妻は、贈り物を持たされ、聖マルシアルのところに遣わされる。b)至福なるマルシアルは心に隠されていることを知ることができた。c)マルシアルの杖は、麻痺した者の上に置かれると、彼を癒す。d)聖マルシアルは贈り物を拒んだ。e)不知の神がボルドー人に崇められていた。f)偶像たちの祭司。g)シギベルトゥスはユピテルに香を炊こうとした。h)悪霊は町を立ち去ろうとしていることを告げる。i)悪霊はマルシアルのことを語る。j)主の晩餐は燔祭でもある。k)悪霊は獲物が自分の手を逃れたのに憤る。l)悪霊たちの神殿は、不知の神の神殿を除いて、破壊される。m)2800人が洗礼を受ける。n)シギベルトゥスの妻ベネディクタは聖マルシアルの杖を麻痺した夫の上に置き、癒す。o)シギベルトゥスは健康を取り戻し、聖マルシアルから洗礼を受ける。

ともあれ、少しの間この話は止めにして、我々が少しばかり離れてしまった話題に戻ろう。それは、キリストの恩寵が、いとも至福なるマルシアルを通じて、彼がなおも肉をまもって生きている間に、行った奇跡のしるしである。ボルドーの町にシギベルトゥスという名の伯がいて、彼は麻痺の病にひどく苦しめられていた。彼は、ステファヌス公がガリア全域で偶像の神殿を破壊し、そして主キリストのために教会をあまねく建てよう命じたことを聞くと、ベネディクタという名の自分の妻を呼んで来させ、彼女に言った。a)「愛する妻よ、神の人のところへ行っただけでなく、死者すらも下界から呼び戻されてなおも生きるという、その方のところである。我々の神々にはこのようなことはできない。だから私の助言を聞いて、25リブラの金貨と十分な金を持って彼のところへ行ってくれ。恐らく私のことを気に入ってくれるだろう。」敬うべきベネディクタはこれを聞くとすぐに、自分に命じられたことを受け入れ、一刻も早く神の人のところへたどり着こうと急いだ。そして彼の面前にやって来ると、言った。b)「主よ、私は私の願いがあなたに知られずにはいないと分かっています。なぜかというと、私が知っているとおおり、あなたは人の意識をはっきりと見抜くからです。」いとも至福なるマルシアルは彼女に答えた。「もちろん、私にはあなたの願いがわかっています。」

す。あなたの夫は体の麻痺を患って6年になります。」ベネディクタは言った。「主よ、あなたのおっしゃるとおりです。夫は言葉を話す以外、体のどの部分も動かすことができません。ああ、良き羊飼いや。ですから私は信頼してあなたに望みをかけました。あなたが人の体からあらゆる病を追い払い、また私たちの国で聞いているように、あなたが死者たちを下界から地上へと戻しているのを、私は確かなことだと分かっておりますから、あなたは私のこの夫をも四肢の病から回復させることができます。ですから、私はあなたにお願いいたします。私と夫の信頼を裏切らないでください。しかし、あなたの命令によって夫が健康を取り戻したなら、夫は家の者すべてを引き連れて、聖なる洗礼の水によって清められるために、あなたのもとにやってきました。」すると使徒は彼女の信仰の誠実さを見抜いて、彼女に言った。c) 「あなたとあなたの夫の信仰がそれほどなのは分かっていますから、あなたは家に戻って、私の杖をあなたの夫の上に置きなさい。そうすれば直ぐに彼は癒されるでしょう。」d) ところで、彼は妻のベネディクタが彼に持参した金も銀も受け取ろうとはしなかった。彼は主がたびたび彼に繰り返して言った教えを、常に記憶に留めていたのである。「ただで受けたのだから、ただで与えなさい。(「マタイによる福音書」第10章8節)」

ところで、ボルドーの町では、異教徒たちの様々な神殿で、悪霊たちの種々の像が崇められていた。すなわち、そこにはユピテルやメルクリウスやディアナやウェヌスのために神殿が捧げられていた。e) また、そこには不知の神の神殿もあった。人々はこの不知の神を主と呼んでいたが、その神がいつ到来するのかは知らなかった。しかしながら、その神の支配は終わることがなく、永遠に続くことは知っていた。このようなわけで、f) 諸神殿の最高の祭司、つまり前述の町の偶像のすべての祭司を統括する大祭司職の保持者は、その神をこの名で呼んでいた。g) シギベルトゥスが、町の全住民をともなってユピテルの神殿に香を焚きにやってくると、h) その悪霊が彼に話しかけた。「お前は、俺たちが、海の向こうの国からここにやってくるあるヘブライ人のために、この町を出て行くことになるのを知るべきだ。i) なぜなら、その男は俺たちの家を破壊するよう指図し、天と地を創造した唯一の主を称えるよう命じるからだ。」大祭司が尋ねた。「そのヘブライ人とはだれですか。」悪霊は答

えた。「その男はマルシアルと呼ばれている。」大祭司はユピテルに尋ねた。「なぜ、あなた方はその男を恐れているのですか。私たちはあなた方を神と信じておりますのに。」悪霊は答えた。「なぜなら、その男は全能の神の友であり、彼を保護するために主から遣わされた12人の天使がつねに供をしている。すなわち、彼は使徒たちの頭とアンティオキアからやって来て以来、j) 主に犠牲を捧げるときでなければ、ぶどう酒を飲まず、肉を食べず、亜麻を着ることもなく、入浴もしなかった。余計なあるいは人を笑わせるような言葉を語らないばかりか、聞くことも望まなかった。なぜなら、彼の口には、常に全能の神への賛美が響きわたっていたからであり、彼が神に願ったことはなんでも遅れることなく成し遂げられた。」大祭司が再びユピテルに言った。「私たちの伯夫人、ベネディクタが彼のところから喜びに満ち心穏やかに戻ってきました。」k) 悪霊は言った。「彼女は祝福されずに、永遠に呪われればよい。」大祭司は言った。「私は町の全住民とともに戻って来る彼女を迎えに行くよう命ぜられました。」ところで、伯夫人のベネディクタが到着して町に入ったとき、長老たちは彼女の前に進み出て、ユピテルから聞いたすべての言葉を彼女に報告した。l) その時、敬うべきベネディクタは偶像の大祭司を呼んで来させ、彼に、すべての神殿を巡り、不知の神の神殿を除いて、それらを粉々に破壊するよう命じた。実に、敬うべきベネディクタはいとも至福なるマルシアルから、m) 配下の全住民2800人とともに洗礼を受けた。ところで、彼女は町に入ると、キリスト教徒の群を呼び集め、彼らに言った。「お願いです。神様のお慈悲を求めましょう。神が選ばれたマルシアル様の約束どおり、神が私の夫を再び健康にしてください。」n) このように祈ると、彼女は夫のベッドのところへ行った。そして彼女が使徒から受け取った杖を夫の上に置くと、筋肉の収縮と血行の不足で動かなくなっていた四肢が、あたかも本来の働きが奪われなかったかのように、すぐに働きを回復した。o) それから、前述の伯、シギベルトゥス自身が、大勢の人を連れて、至福なるマルシアルのところに赴き、彼から聖なる洗礼による再生を授かることができた。そして、神から与えられた恩恵へのお礼として、彼はすべての家臣とともに、祈りと感謝による十分な行為を以てマルシアルに報いた。その後彼は日々長く幸せに暮らし、神への奉仕に忠実であり、自分に与えられた有益な忠告

に従う堅実な信者であった。

XVIII. 他の奇跡。聖マルシアルの杖は、火の前で振り上げられると、火を消す。

ポルドーの町で、主が至福なるマルシアルをとおして行われた、もう一つの奇跡について語ろう。人々の傲慢が酷くなったために、前述の町が大火によってもはや滅びるほどに焼き尽くされ、さらに燃え尽きそうになって、彼らの財産がほとんど消滅するかと思われたとき、敬虔なベネディクタは、夫の健康を回復させるために聖なる使徒から授かっていた杖を手にとると、火にかざしてこう述べた。「至福なるマルシアル様が賛美するキリスト教徒らの神よ。差し迫った危機から私たちを救い出し、私たちにあなたのお慈悲をお示してください。あなたは、あなたのすべての信者に、あなたが呼び求められるよりも前に、助けようと約束してくださいましたのですから。」貞潔なベネディクタのこの言葉によって、相応しくも大火は見事に鎮まり、火災のいかなる痕跡も残らないほどであった。

XIX. 聖マルシアルはガロンヌ川を越えてマウリカニアに行った。悪霊に取り憑かれた9人の者たちがポルドーから聖マルシアルのところに連れて来られ、癒される。a) 悪霊たちの恨み。b) 聖マルシアルの祈り。c) 悪霊祓い。

こうしたことが起こっている間に、至福なるマルシアルはガロンヌ川を越えてマウリカニアと呼ばれる場所へ行くよう聖霊に告げられた。そこには至る所から群衆が集まっていたが、彼らは繰り返し励ましを受けながら、信仰の秘義を学びたいと望んでいた。そして、永遠の命に有益なその信仰の初歩を、既に以前に、しるしの顕示と頻繁な奇跡の顕示をとおして受けていた。ところで、これら群衆に神を信ずる用意のできていることがわかると、使徒はそこに3カ月とどまった。さらに、ポルドーの町から親族によって鎖に繋がれ、治療のためにそこへ連れてこられた、9人の悪霊に取り憑かれた者たちがいた。この者たちは神の人の前に出て来ると、地に倒れ、死んだかのように横たわっていた。a) 確かに、至福なるマルシアルは前述のポルドーの町から彼らに取り憑いていた悪霊を追い払っていたが、その後怒った悪霊たちが再び彼らに入り込んだた

めに、彼らの心の中では激しい錯乱が猛威を振るっていたのである。さて、彼らの親族は、神の人の前に鎖に繋いだこの者たちを立たせると、涙を流して懇願し始めた。彼が日頃から皆に分け与えている哀れみを、悪霊に苦しめられているこの者たちを癒すことにも拒まずに示して欲しい、と。b)すると、至福なるマルシアルは、皆とともに祈り、主に次のような祈りを注いだ。「主よ。あなたは、あなたの僕である私たちに、祈りと断食によらなければ悪霊を追い払うことはできないとおっしゃいました。私たちはあなたの限りないお慈悲を願います。あなたの力ある命令によって、この忌まわしい悪霊たちがあなたの被造物の体から追い払われますように。また、あなたの僕たちが健康を取り戻して、絶え間ない賛辞によってあなたの聖なる名を称えますように。」実際、彼らは魂が抜けたようになって横たわっていたので、人々は皆彼らが死んだものと思っていた。c)さて、彼は祈りを終えると、彼らの上に手を伸ばして言った。「哀れな悪霊たちよ。私は、ユダヤ人たちが十字架に架けた我らの主イエス・キリストの名においてお前たちに命ずる。この者たちの体から出て行け。そして、今後彼らに入ることも許さない。だが、だれにも害を加えずに地獄へ行き、審判の日まで苦しめられるがよい。」この言葉を聞くと、悪霊たちは血まみれになって彼らの口から出て、どこにもいなくなった。

XX. 他の奇跡。シギベルトゥスの従者たちが難破の危機を脱し、救われる。 a) 聖マルシアルの杖は宝物として保管されている。b) 聖マルシアルの杖が高く掲げられ、祈りがあげられる。c) 聖人たちは、身体をもってそこに居合わせなくとも、呼び求められると、願いを聞き入れて祈る。

この同じ町で、至福なるマルシアルをとおして神が行われたと知られている、他の奇跡も見過ぎてはならない。ボルドーの町の伯シギベルトゥスは、いとも至福なる人物がマウリカニアに滞在し、日々説教によって様々な人々をキリストのために獲得していることを聞いたので、騎士たちの大軍団を率いて、また食べ物と飲み物を十分に調べて、彼のところに赴こうと望んでいた。と同時に、伯は真の信仰の教えによって、あるいはかつて彼から学んでいた習慣についての教えによって、あらため

て勇気づけられたいと願っていた。ところで、伯の命令によって、従者たちは魚を捕りに出かけ、様々な種類の魚を捕らえるのに相応しいいろいろな網を持って、船で海に乗り出した。彼らがあらゆる種類の魚を携えて、舟を着けるのに相応しい海岸にたどり着こうとしたとき、突然海に嵐が起こり、そのうちに彼ら自身と彼らの船に災難が降りかかり始めた。確かに、彼らは陸地から離れたところにあつて、かろうじて300スタディオンの浮標のところにいる。ところで、伯の配下の人々は皆、敬うべきベネディクタとともに岸边にいて、彼らには天から送られたように思われた、かくも恐ろしい災難が近づいてくるのを恐れていた。そして、いまやその者たちが舟もろとも沈み始めたとき、a) 敬うべきベネディクタは、尊い宝物として家に保管していた使徒の杖を受け取り、b) 両手で持って天に掲げ、力強い声で叫び、言った。「キリスト教徒たちの神様。私たちが至福なるマルシアル様から聞き知った神様。あなたに仕える者たちを重大な死の危機からお救いください。」神のおかげで、嵐は即座に鎮まり、彼らはあらゆる魚、船、網とともに無事海岸にたどり着いた。この光景を見て、集まっていた人々は皆、以下のことで主を称え始めた。すなわち、主はその僕に測れないほどの好意を示されたのである。c) また、聖人たちは身体を以てそこに居合わせていないときでも、信者たちから呼び求められると、言うより早く願いを聞き入れ、嘆願者の希求を速やかに主に伝えるのである。なぜなら、彼らは主とともに永遠に生き、支配しているのだから。